

「人間の創造」

2020年10月02日

神は言われた。「我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう。そして、海の魚、空の鳥、家畜、地のあらゆるもの、地を這うあらゆるものを治めさせよう。」神は人を自分のかたちに創造された。神のかたちに創造し、男と女に創造された。(創世記1章26節～27節)

神は、造ったすべてのものを御覧になった。それは極めて良かった。(創世記1章31節)

神は6日間で、光と天と地と海と、天体を含め、全てのものを創造された。第六の日の最後に、人間を創造された。神は人間を創造するという目標に向かって、創造の業を進めている。その人間創造に関し、二つのことが言われている。一つは「我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう」である。神はお一人なのに、「我々」と複数形で書かれていることが納得できない。これは、天上の神の会議ではないか。詩編82編1節に「神は神の集いの中に立ち／神々の間で裁きを下される」と、神を中心に「天使たち」が加わった天上の会議で、複数の「我々」によって裁きが下されていると歌っている。天上の会議の「我々」を踏襲したものと思われる。そして、人間は「神のかたち、神の姿」に創造された。「神のかたち」は、どういう形なのか。神は見えない方なので、目に見える体形などはない。人間は、他の被造物とは違う知性、感性、精神性という魂を持っているが、「神のかたち」とは魂をもって「対話」することではないか。神は、人間を創造するに際し、神の会議で対話してきたように、人間と対話関係が結べるように創造された。人間は死に逝く有限な存在であることを知っている。それは、必然的に永遠への憧れを生み出す。コヘレトの言葉3章11節aに「神はすべてを時に適って麗しく造り、永遠を人の心に与えた」とある。心に永遠を与えられた人間は、永遠の神と対話できる。祈りにおいて、神に聴き、答えを聞き出す。動植物は置かれた環境で、食を得るため、子孫を残すために、懸命に命を精一杯輝かして生きる。それらには永遠を問う「神のかたち」はない。人間は、神と対話する弁証的關係に造られた。神との関わりを求め、生きる存在として「神のかたち」が与えられた。これは、神の形に造られた隣人を犯してはならないという人間の尊厳を主張している。

もう一つは、人間に「海の魚、空の鳥、家畜、地のあらゆるもの、地を這うあらゆるものを治めさせよう」と、自然界を治めることを託した。そして、神は男と女に創造し、人は関係性の中で生きるように定め、「産めよ、増えよ、地に満ちて、これを従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這うあらゆる生き物を治めよ」と祝福し、生き物を治めさせた。治めるとは神が祝福して創造したものを、神の祝福に相応しく対応するということである。

ところが、人間は利益と利便さを求め、自然の恩恵を貪り、環境に適応できない植物、動物を絶滅させ、地球に危機をもたらす温暖化の現状を生み出し、神の創造の領域まで踏み込もうとしている。創造の秩序への回復が、神の創造を信じる者の責任であろう。

神は、種をつける草と実がなる木を人間に与え、食物とさせた。人間創造の当初は菜食であった。また、地の獣、空の鳥、地を這う生き物に、青草を食物として与えた。命を支える血を食してならないという規定である。神は、造った全てのものを御覧になり、「それは極めて良かった」と、大いなる肯定をされた。第六の日で、創造の全てを完成させた。この創造神話は、神は対話できる人間創造を最終目標としている。神は人間に世界を与え、人間と共に生きようと祝福して、造られたのである。神の愛は人間に向けられている。これが創造のメッセージである。